○…筑前琵琶橘会全国大会　十一月十四日(日)午前十時佐世保市民会館、司会佐世保橘会。

日本琵琶悠絃会六月例会

六月二十七日(日)昼東京中野区地域センター。門琵琶合奏▽山崎錦幽、八束一峰▽菅公▽八束▽乃木将軍▽金尾秀水▽粟津の露▽伴旭友▽武蔵野▽大富士岳鮮▽彰義隊▽佐藤湘春▽飯盛山と江差追分▽大和田鶴道▽井伊大老▽中村洲心▽忠度▽軽部岳瑞▽衣川▽若宮旭登▽大楠公▽杉山旗水。五時半散会。

巻田旭玄氏受賞記念祝賀会

七月三日(土)昼大阪梅田本むさし会館、司会大阪旭会長野坂旭樹氏、(紺綬褒章受賞祝賀会)。山崎旭萃、平井春嶺、柴田旭堂、梅原旭濤、田中旭昇、石橋旭嶺、木庭旭山、奥村旭美、横野旭鳳、篠原旭洋、宮田旭昇、富樫旭桂、石井旭誠、高田旭殊、山本旭洋、中村旭澄、工藤旭城(順不同)の諸氏出席。山崎女史の代表祝詞、祝盃中に二、三琵琶演奏の後隠し芸続出、記念撮影を終り平井氏の音頭で万才三唱、五時目出度く散会した。

京都琵琶協会七月例会

七月十一日(日)昼本部平井会長宅。馬場鴨水、林旭鼎、田中歌水、梅原旭濤、山岡旭清、安住旭康、牧秋静、桜井旭冨、平井春嶺、高橋正雄の諸氏出席。送別▽馬場▽静▽牧▽恩讐の彼方へ▽田中▽五條橋▽梅原▽竜の口▽桜井▽項羽▽山岡、以上研修演奏のあとレコード鑑賞に移り永田錦心▽石童丸、高峰筑風▽常陸丸、豊田旭穰▽義士の本懐。次ぎに七月二十三日祇園八坂神社献奏会の件やその他を協議して小宴、七時散会した。

各派琵琶合同奉納演奏会

恒例京都祇園祭協賛の首記が七月二十三日(金)夕五時八坂神社能楽殿で京都琵琶協会の主催により厳粛旦つ華々しく開催された。二十数年来毎年この日の行事で四時半一同打揃って本殿に参拝、神官のお祓いを受け、五時から協会員及び弟子達による各派琵琶の献奏が繰広げられたが、能楽殿の前には天幕が張られ数十人の聴衆は開会前から床几に腰をおろして熱心に歓賞、八時半盛会裡に閉会した。常陸丸▽佐藤、曽我部▽源実朝▽佐々木▽水天門▽山田明嶺▽項羽▽山岡旭清▽羅生門▽田中歌水▽静▽牧秋静▽竜の口▽桜井旭冨▽青葉の笛▽矢吹旭津美▽薩摩の乙女▽梅原旭濤▽新選組▽木下皇水▽本能寺▽平井春嶺。三人▽西郷隆盛▽林▽禅師と正宗▽青木▽舌切雀▽斉藤▽加藤清正▽一坊寺▽桐一葉▽田中、田中▽源実朝▽佐々木▽合奏五絃段▽一同▽伽羅の兜▽永井旭美▽川中島▽宮田旭鶴▽北の庄▽斉藤旭見▽小野訓導▽篠原旭洋▽戦艦大和▽細川旭穂▽曲垣平九郎▽一坊寺旭清▽青葉の笛▽西村旭冨▽竜の口▽桜井旭冨▽桜井の駅▽田中鵬水▽常陸丸▽会主矢吹旭津美▽(賛助)粟津ケ原▽林旭竜▽(来賓)巌流島▽酒田佐藤智水▽光秀の最期▽京都平井春嶺▽鴨川の露▽大阪山崎旭萃。

きがとあ

から梅雨で終るのかと思っていたら七月末になって長崎や熊本などに甚大な被害を与え、続いて台風十号と戻り台風九号の連続来襲で近畿、中国、四国から東海、関東、東北と本州の広域にわたって大きな災害をもたらした◉本号の編集をはじめた八月初旬頃に、未だ各地の生ま生ましい後遺症が新聞やラジオ、テレビで報道されていて、今更ながら天災の恐ろしさに身のひきしまる思いがする◉おくればせながら被災者の方々に衷心御見舞申し上げる◉今年の夏は暑さが厳しいと気象台が予報している、本号がお手許に届く時分には未だ残暑が強いと思われるが御愛読者の皆様、どうぞ充分の御自愛を切に祈り上げる。

筑前琵琶三美会演奏会

八月八日(日)昼京都東山安井金比羅会館。第十四回の催しで弁財天合奏▽一同▽君が代▽

日本琵琶楽協会関西支部役員会

八月一日(日)昼京都平井副会長宅。出席者＝山崎旭萃支部長、平井春嶺、柴田旭堂両副支部長、富樫旭桂、菅旭香、田中旭昇、矢吹旭津美、小林、植村寛水の各役員(順不同)。山崎支部長の開会の辞に続き平井副支部長から去る六月五日開催の名流演奏会の詳細な収支決算報告があって一同了承、その反省会で種々意見の開陳があり、次ぎに本年度一泊懇親旅行を十一月二十一、二の両日(木、金)愛知県蒲郡の三谷温泉行きに決定、五時閉会した。

〒565　昭和五十七年九月一日発行(非売品)
編集者　村　寛
発行所　京　絃　水
吹田市山田東一丁目三一　B八一四
電話　〇六(八七五)〇三二六番

琵琶機関紙　京絃　第三三九号　京絃社

おんなの都(みやこ)(八)

落合一誠

皇妹和宮(かずのみや)(1)

住み馴れし都路出でて今日いく日
急ぐもつらき東路(あずまじ)の旅

数え年わずか十六歳の少女和宮は、幾首かの和歌を残して将軍家茂の許へ嫁いでいった。それは決して自ら望んだ道でないばかりか、許婚者(いいなずけ)有栖川宮と別れての涙の首途であった。

一天万乗の天子の妹としてこの世に生を享け、しかも京から東國へ嫁いで行かねばならなかった和宮は、幕末動乱の世の片隅に咲く一輪の悲しみの花として世に知られている。

弘化三年(一八四六)閏五月十日、京都御所の東側建礼門の近くにあった橋本実久邸で生ぶ声をあげた一人の姫君があった。父は仁孝天皇、母は権大納言橋本卿の娘で、典侍橋本経子、そして異母兄にあたる方が孝明天皇である。

ところが、いかなる星の下に生をうけられたのか、この姫君は、生誕の年の正月に父皇を喪われ、生まれながらにして父上の顔を知らぬ不幸を背負っていた。

皇女は生誕して命名がすむと宮中に戻る習慣であったが、和宮と名づけられたこの姫宮は、宮廷の都合で外祖父橋本権大納言の手許に預けられ、十四年間の久しきにわたって、そのままになっていた。だから、皇妹でありながら遂に宮廷の空気を知ることなく過ごされたが、却ってその方が家庭的な幸せを味わうのによかったかも知れない。

祖父と祖母と母の膝下で何不自由なくくすくすと成人、その間、年に二、三度は宮中へ参内して、兄君孝明天皇に対面されている。

嘉永四年、六歳で天皇の配慮により、有栖川宮織仁親王の王子熾仁(たるひと)親王との婚約がきまった。その時親王は十七歳、和宮とは十一も年長で、無論和宮は結婚の何たるかも御存知ない。けれど、いずれ成人の暁にはこの方と華燭の典を挙げるのだと、幼ない胸に思い定めておられた。

当時世襲の宮家は、伏見、桂、閑院、有栖川と四家あって、皇女は皆この四家か、或いは近衛、九條、一條、二條、鷹司の五摂家と縁組される慣例となっていた。そして程よい嫁ぎ先のない場合は、生涯独身で過ごすか、尼となって門跡寺院を相続するかであって、四宮家、五摂家以外に結婚は出来なかった。和宮はこうして行く末の行路もきまり、それにふさわしい教養も身につけて、十四歳の正月を迎えられたが、不幸にも思いがけない祖父の死に見舞われることになった。

元来橋本家は閑院流の系統に属していて、官位は権大納言どまりの家柄であった。そして母経子は十四歳で仁孝天皇の後宮に入り、十八歳で和宮を産んだ。

さて、祖父を失った悲しみの直ぐ後に、明年の婚儀を控えた和宮は、当時あき御殿となっていた桂御所へ入いることになった。万延元年(一八六〇)二月で、それを契機として皇妹の運命は大きくゆがめられていった。

それは、ペリーの来航によって外国の圧迫が加わり、開國通商が行なわれないなら、大砲で江戸を焼き払うぞとおどされた幕府は、諸大名の反対を押し切って開國條約締結のため、二百五十年間放棄していた朝廷へ勅許を求めてきたことから、俄かに朝廷と幕府の間が厳しく変っていった。

異國ぎらいの孝明天皇は、勅許どころか反

対に攘夷を命じられ、幕府は攘夷派の大名や次期将軍に一橋慶喜を擁立せんとする人達を弾圧して、多くの志士を処刑した、世にいう安政の大獄で、憤慨した水戸浪士たちは、時の大老井伊直弼を桜田門外で暗殺した。

その結果幕府は、攘夷派の運動を封じるため、天皇家の姫宮を将軍の御台所に迎えようと思い立った。いわば政略結婚で、無論天皇が好まれよう筈はなかった。しかし武力と財力を封じられた朝廷は、遂にこの提案を受け入れざるを得ない処まで追いつめられていった。

ところが、将軍家茂の配偶者に適当な皇女は、皇妹敏宮、和宮、それに皇女富貴宮のお三方で、敏宮は既に三十歳、富貴宮は産後間もないみどり子である。

四絃漫筆

島津天嶺

(十三) 琵琶を聴いて(2)

前月号で、東京の正絃会で歌われている。「川中島」もおかしいところがあるようだと書いたが、昨年秋の正絃会の演奏会で、この曲を録音したテープが見つかったので調べて見たら思っていた通りこれもずい分変なものである。即ち「天文二十三年」の「出だし」から「颶風砂を捲き百雷岩を抜くに異らず」までは原作の通りであるが、ここで「信玄流れを乱して走るところを謙信只一騎」と一転する、そして「二の太刀は早や肩先に切りこみぬ」まで原作通りに歌い、ここで「鞭声粛粛」の詩吟となり、あとは原文通り「故郷に帰りけり」で終っているが、第一に勢よく闘っていた信玄が何故突然敗走するのかこの説明がない。そして第二には二の太刀を浴びせた謙信が、何故信玄を打ち漏らしたか、この理由もわからない。

御承知のように原文では「何れを勝ちと白真弓」と一応互角の戦、ところが武田方が謙信の旗本に奇襲をかけ上杉方が危うくなる、そこで宇佐美定行の軍勢が救援に赴いて武田勢を追い落とし、信玄が「流れを乱して走る」ことになる。又二の太刀を受けた信玄が、原大隅の働らきによって辛うじて逃げる光景も原文では詳細に語られているが、この部分を省略しているので物語りとしての筋が全然通っていない。

この歌をよく知っている人は、演奏者の妙技に聴きほれ十分満足しているのだが、文字にして書いて見たときに、筋がわからない歌はやはり歌うべきではあるまい。

ではこの歌を十五分で歌うにはどうしたらよいか。考えて見るとこの歌は、相対峙して動かなかった両軍が干戈を交えるようになる経緯を述べた前段と、二将の一騎討ちという後段とからなっているが、重点は後段にあるから前段を全部省略することを考えた方がよいようである。

即ち謡い出しの部分を少し改めて、例えば「天文二十三年秋の半ばの頃かとよ、甲越合せて三万騎、川中島に打って出で、死力をつくして攻め闘う」とでもして、このあと「越後の勢退けば甲斐の軍これを追い」の所につづけ、あとは原作通り歌ってはどうであろうか。これでも時間が不足するようならば、芸能性は多少落ちるが、漢詩の部分を省略するか、最後の「信玄はその夜のうちに云々」の部分を省略すればよいように思う。

これはさておき、NHK・FMで今ひとつおかしいと思ったのがある。これは放送日時がハッキリしていないが、「オクムラキョクスイ」という方の「大楠公」の曲。桜井の駅の別れの場面であるが、「父は兵庫に討死の覚悟定めて候えば、汝が顔を見んことも今日を限りと思うなりと、真心こめてさとしつつ」と歌っておられたが、これでは何をさとしたのかよくわからない。「われ亡き後は云々」と父の遺志をついで南朝方にあくまでお味方せよとさとしたのであるから、この部分が省略されるとこの歌の価値は半減する。一工夫いるように私は感じた。もっともこの歌の原文を私は読んでいないので、或いは私の「勇み足」かも知れない、そのときはご宥恕願いたい。

今ひとつ、それは池辺義象作の名歌「彰義隊」の歌い方である。この歌も十五分では歌

いきれないので、東京の正絃会の方々の弾奏は、崩れのあとの大干落ち「屍は山上の樹根に堆し」のところで終っているが、このような省略法であれば川中島のような筋が通らぬということはない。しかしこの歌の後半の「悲壮」の部分がすっかり省略されるのでやはり問題である。さらに「大干落ち」の節調と琵琶の手でパタリとやられると、如何にも「中断」という感がつよい。ここでやめるにしても、せめて歌い方は「樹根にうづたかし」と「切り」の節にしてもらいたいと思う。

なおこの歌の「十五分間歌唱法」について私はこの歌中の漢詩と連鎖する方法をとっているが（このことについては本誌三二九号でも触れている）参考にして頂けば幸甚である。

最後に今ひとつ、それは演奏中の聴衆の拍手。一般に音楽会では聴衆が音をたてることは禁物、ところが琵琶会では往々にして大拍手が起こることがある。聴衆が演奏に感激して拍手するのを禁ずることは問題かも知れないが、他の静かに聴いている人のためにも、拍手はさしひかえるべきであろう。前月号の本誌第五回日本琵琶楽名流会の記事の中にも「聴衆は静粛でマナーの立派さに感心させられた」と出ているから、主催者も演奏中の拍手は歓迎してはいない。百尺竿頭一歩をすすめて「演奏中の拍手はご遠慮下さい」と会場入口にでも掲示しては如何なものであろうか。

琵琶は静かに、できれば瞑目して聴きたいものである。

（訂正）四絃漫筆(四)琵琶歌と漢詩の項で「台湾入」の作者を福本日南と書きましたが西村天囚の誤りでした。訂正致します。

筑前琵琶吉田竹子

井上精三

明治後期から大正にかけて、筑前琵琶は全國を風靡し、最盛期には全國に六千名を越す琵琶教師がいた。博多人によって創案されたこの筑前琵琶を、最初に中央に紹介したのは吉田竹子であった。

明治四年に福岡藩士の娘として生れたものの、早く両親に死なれ、他家の養女になって十三歳で柳町に売られ、のちに新茶屋（水茶屋）の料亭福屋で、「金時」の芸名で左褄をとった。美人であり、唄も三味線もうまく売れっ妓だった。金時の美貌と音楽の才にひかれたのは、博多下奥堂町の銘酒金盛の主人加野熊次郎だった。

加野は音楽にも通ずる趣味人で、そのころ行なわれていた盲僧琵琶の改良に協力していたが、金時を落籍して愛妾とし、二人で研究して新しい琵琶の演奏方法を案出し、数曲を創作した。加野は養子であり、本妻のかめは評判の美人だったが、二十代の若さで妾を囲い音楽に熱中するとは、女性の一人や二人を持つのが男の甲斐性だ、といわれた時代とはいえ、そのころの博多の大商家の鷹揚（おおよう）ぶりがうかがえる。

郷土出身の金子堅太郎が帰福したとき、加野は竹子の改良琵琶を聴いてもらった。翌明治三十年に加野は竹子を連れて上京し、金子のあっせんで向島の大倉別邸で、政界、財界芸能界の貴顕紳士の前で筑前琵琶を披露し、みんなに感銘を与え、竹子は大いに面目をほどこした。

竹子の成功から二年後の明治三十二年に橘旭翁は、皇后陛下の御前で演奏して、筑前琵琶の地位を不動にし、愛好者が全国に増えて大衆芸能の王座にのし上った。

竹子も筑前琵琶吉田流の宗家となり、東公園の妾宅にあって門弟に教授し、加野の愛情も受けて幸福な日々を過ごしていたが、数年前からわずらっていた結核が悪化した加野は明治三十六年、三十九歳で逝去した。

旦那に死なれた竹子は、妾宅を大改造して待合茶屋を開業したが、思うような成績があがらず生活も乱れ出した。加野に囲われて十数年。世話する人の手まえ、しとやかだった竹子も、旦那の死とともに芸妓時代のように羽根を伸ばし奔放な振舞いに変ってきた。

竹子は金子堅太郎の紹介で、伊藤博文に可愛がられていた。伊藤が西下するごとに酒席に招かれ、琵琶を演奏して旅情を慰めた。明治四十五年一月の九州日報は『吉田竹子は伊藤公が朝鮮統監の折、遙々韓國まで呼び出さ

れて旅情を慰め、その後も某総裁に一曲二千円で弾奏した程のらつ腕家である…』と報じている。米一升十二銭のとき、竹子は美貌と芸で稼ぎまくった。

その後、東京で琵琶教授をはじめたが入門者は少なく、料亭その他の余興出演が主体となり『夜な夜な新橋、赤坂に咲くさすらいの花となった』と、国民新聞に酷評された。

寄席芸人と意気投合して大正十年アメリカ巡業もしたが成功せず、博多へ帰り病を得て大正十二年十月、波瀾に満ちた一生を終えた。ときに五十二歳。

二〇三高地（上）

中川　保

十九世紀末、未開地の多いアジアは、欧米列強の植民地化の嵐に見舞われていた。この嵐から國を守るため、誕生間もない明治維新政府は、朝鮮半島の支配権を目指していた。

これに対し、ロシアの南下政策は満洲から更に朝鮮にまで及び、日本政府の意図と真っ向から衝突した。

開戦か、外交による妥協か、国内では激論がうずまき、政府首脳もその態度を決しかねていた。軍事力、経済力ともに弱小な日本にとって、ロシアは敵とするには強大すぎた。幾度となく開かれる元老閣僚会議で、次第に開戦論が高まっていったが、ロシアの強大さを熟知している伊藤博文は、強く戦争回避を主張していた。巷には激烈な開戦論で民衆を扇動する壮士グループが増え、戦争反対を叫ぶ平民社グループと対立していた。

その頃、伊藤博文は参謀本部次長児玉源太郎将軍と会見し、対露戦の勝算について意見を問うた。慎重な伊藤に対し児玉は、早いうちにロシアに打撃を与え、長期戦を避けて講和に持ち込まねば勝つ道はないと訴えた。涙ながらに語る児玉に伊藤は、早期決戦、早期講和を決意した。

明治三十七年二月四日。

御前会議で明治天皇は、開戦の決議に裁下を下された。ここに日本の命運を賭けた日露戦争の幕は切っておとされ、開戦と同時に日本軍は、陸と海で破竹の進撃を開始した。

伊藤は同時に、前法相の金子堅太郎を招きアメリカのルーズベルト大統領に講和の調停役を引き受けて呉れるよう説得、要請した。事の重大さと困難さに金子は返答を渋ったが國家に一命をささげるという伊藤の気迫に押されて、渡米を承諾した。

戦況は次第に芳しくなくなり、海軍は、旅順港に閉じこもったロシア東洋艦隊に手こずり、陸軍は新たに第三軍を編成して、司令官に乃木希典を命じた。旅順の陥落が乃木に架せられた任務であったが、旅順港は天然の要害であり、ロシア軍はここに世界一という大要塞を築いていた。乃木には、この戦いでもたらされる損害の大きさが憂慮されたが、思い患らう余裕はなかった。それはバルチック艦隊が東洋艦隊と合流すべく出港準備を始めているという報告が入ったからで、もし、両艦隊が合流したら、日本の敗戦はさけられない。

ここに於いて、今まで問題にもされていなかった〝二〇三高地〟が、要塞攻略の重要な問題として、俄然クローズアップして来た。

しかし、この正面攻撃の繰り返しのなかで、ロシア軍の最新兵器「機関銃」の前に、我が軍は屍体の山を築いていった。こうした絶望的な戦いのなかで、小賀少尉の率いる一隊が血路を開き、兵たちの間に活気が甦ったが、後に続くには弾薬もなく、乃木は攻撃を一時中止せざるを得ない状態となった。

篁流（たかむら）琵琶・詩吟

西篁会主　柿沢　篁峰

〒534　浜松市安松町三三ノ四
電話〇五三四（六一）三五五四番

吉井良三

〒567　茨木市新郡山二丁目一ノ一〇七
電話〇七二六（四一）二八一六番

残暑御見舞

大阪旭香会

菅旭香

〒531　大阪市大淀区長柄西二丁目十二ノ五
電話〇六（三五一）四〇八一番

五絃閑話

水藤五朗

長短

琵琶人の幾人かが集まると、必ず今日の琵琶、そして今後の琵琶の悲観的状況が話題になる。しかし、このような悲観論を述べる事だけでは、真の解決からはほど遠い事も、多くの人々は知っている。だが、現実には、画期的な改革は何等起こらず、いや、起こる要素があったとしても、それが大きく波及してゆかないのである。むしろ、本当の課題は、こゝにある、と私は思う。

現在、琵琶を多くの人々に普及させようと努力する琵琶人は多数いる。そして、過去に於てもそのための努力をした人は多くいた。だが、結果としては、それ等の努力は実らなかったと云える。これは何故なのだろうか。

歴史はくり返す!!との格言が真理の一面であるならば、今日の琵琶人の努力も、結局は空しいものとなってしまうのかも知れない。

そこで、この様な歴史を繰り返さないための計画が立てられなければ、と私は思う。

では、それは一体どう云うものか、と考えてみると、全く立往生になるのが実状である。

先日の新聞報道によると、屋根の上のバイオリン弾き―森繁久弥主演の舞台劇が、百万人の観客を集めたそうで、持続するその人気の高さは驚くばかりである。残念乍ら、私はそれを観ていないのだが、百万人以上の人々を動員する芝居だから、それなりの魅力があるものと想う。

テレビで野球や相撲を見ていると、何千、何万の人々を収容した客席が映つる。そのたびにあの十分ノ一でも琵琶会に来てくれたらなあ!!と感嘆の声をあげるのは、決して私ばかりではなく、多くの琵琶人がそうであるにちがいない。これは私の亡母もそうであった事からも察せられる。

大正末の琵琶雑誌を見ると、各地の会の報告が載っていて、そこに観客数五百とか七百、多くは千人、少ない時でも二百か三百の表示がある。今日のそれとは隔世の感であって、今更、その両者を比較して論じようとは思わない乍ら、やはり一沫の懐旧の情は残る。

当時、多くの人々を集める興業として第一であった映画は、今テレビの前に風前の灯火の惨状であると云える。これは映画そのものの責任であるよりも、むしろテレビの力、即ち、家庭で見られると云う安易さが映画芸術を圧したことの証明である、と人々は説く。

すると前述した百万人の観客を集めた「屋根の上の…」はどうなのだろうか。映画の退潮が単にテレビの安易さによるものであるな

残暑御見舞

大師範　西川旭操

〒670　姫路市田寺池の内八四二ノ八
電話〇七九二（九六）三八四四番

第五十二回
筑前琵琶旭会全国大会

とき　九月十五、六両日午前十時
ところ　姫路市民会館
主催　筑前琵琶日本旭会
司会　姫路旭会（会長西川旭操）

らば、映画と同様に、舞台演劇も退潮興業として取扱われている筈である。が、現実には一人の主役のワンマンショー的「屋根の上の……」の観覧のための百万人以上の人々が集まっている。更には、全国いたる所で、いろいろな演劇がくり広げられている。こう考えると、ただ今日の映画をテレビの圧力とのみ限定してしまうことは危険であって、真の意味での映画擁護とはならないと云える。

今後の琵琶を考える時にも、同じことが云えないだろうか。

琵琶の退潮を詩吟の流行と対比させる声は多い。それは、琵琶が長い演奏時間を要するのに比べ、吟が三分前後であって、同時に、楽器の難かしさを伴なっていないのだと云う。確かにこれ等の事実はある。聴く側からすれば、少しでも短い方が退屈もしないし、あきる事もない。演者にしても、或る意味では、ラクである、又、楽器については、吟だけの方が弾き語りをするよりも、安易であることは当然である。

そこで、琵琶の演奏をもっと短かくせよとか、歌絃分離を図れとかの意見が唱えられるのである。

が、しかし、演奏時間の長さは琵琶だけの問題ではなく、箏曲、長唄、更には義太夫など共通の課題でもある。又、楽器についても箏、三味線、尺八等の全てが楽器を必要としその中でも、箏曲、地唄などは弾き語りである。こうしてみれば、必ずしも、時間と楽器が絶対条件ではないのである。

本当に考えなければならない問題は、三十分の演奏が飽きるものでないような状況を作り出すことであり、逆に云えば、五分の琵琶曲であっても、三十分位に思うような退屈する状況を作ってはならないことである。

この状況を作り上げる要素は決して一つだけではない。ややもすると、名人であれば…と云う側面的な意見に無始してしまう傾向の琵琶界なのだが、仮りに名人であったとしても、客席を感動させる諸条件に即さない限り五分の短時間であっても、飽きられてしまうことがある。又、反対に、名人ではなくても飽きることのない状況が満たされているのならば、かなりの長さの舞台を作る事も可能である、と云える。

琵琶人口の増加は、いくつかの要素が満たされて、聴く側にとって、決して飽きる事のない時間が生まれた折、確実に達せられるのである。その幾つかの要素がたびたび記してきた如く、琵琶の世界に欠けているのである。

上原まり（旭艶）嬢放映

八月三十日(月)夜八時に始まって、九月六日、十三日、二十七日の各月曜日夜八時から五回にわたり各四十五分間、NHK教育テレビで「源平合戦記」が上映され、上原まり嬢がナレーターとして、筑前琵琶演奏を交えながら放映される。

一泊懇親会

京都琵琶協会では七月十六―七日に須磨荘にて、首記懇親会を開催した。

参加者は平井春嶺、梅原旭潯、矢吹旭津美、田中歉水、林旭朋、山岡旭清、桜井旭冨、楊光子、安住旭康、平井恵子、高橋正雄の十一名に、山崎旭萃師が特別参加された。

当日は折悪しく雨の日だったが、正午阪急三宮駅に集合、東天紅のバイキング料理で昼食をとり、雨中を三台のタクシーに分乗して須磨荘に到着した。ここはチェックインが午後四時半とのことだったので、一部屋を休憩ということにして借り、雑談や将棋にて過ごし、四時半に分室して、夫々入浴。夕食後一部屋に集まり演奏をした。即ち、戦艦大和―田中▼竜の口―桜井▼潯陽江―平井と三氏が研究曲を発表、諸師の高評を受け参考とした。その後芸談やら故人を偲ぶ話などに時間を過ごし、午後十時過ぎ四室に別れ就寝したが、楊光子女史は帰宅された。

翌十七日は琵琶の音に起床。これは熱心な桜井氏が自室で弾法の稽古を行っていたのであり、その勉強振りに感心させられた。

午前九時過ぎ須磨荘にて記念写真を撮り、三台のタクシーに分乗して須磨離宮を拝観、その美観に感心した。それより又タクシーに分乗して安住旭康女史宅を訪づれ、昼食を共にして有意義だった一泊懇親会を終り、阪急三宮駅で解散した。（X　Y　Z生）

（須磨離宮公園にて）　右から＝山岡、平井夫人、平井、桜井、林、田中、山崎、矢吹、安住、高橋、梅原。

（予　告）

○…邦楽琵琶まつり錦秀会木原綾子演奏会　九月五日(日)十一時、東京茅場町第一証券ホール、広島板谷旭邑女史賛助出演。

○…京都琵琶協会九月例会　九月十二日(日)午後二時、本部平井会長宅。

○…堺開口神社秋季大祭琵琶献奏会　九月十五日(休)午後一時、大阪琵琶同好会協賛。

○…筑前琵琶旭会全国大会　九月十五、六両日午前十時、姫路市民会館。

○…錦心流琵琶秋田演奏大会　九月十九日(日)正午、秋田市協働社大畑ビル、主催一水会秋田支部。（第二十回近県親善の会で秋田新潟、鶴岡、酒田四支部会員の外東京本部から二名出演。）

○…第十五回日本琵琶楽コンクール　九月二十六日(日)十一時東京銀座ガスホール、主催日本琵琶楽協会。

○…京都伏見稲荷大社琵琶献奏会　十月十一日(休)午後一時、大阪琵琶同好会協賛。

○…各流派琵琶秋季演奏大会　十月十六日(土)正午京都商工会議所ホール、主催京都琵琶協会。会員の外、大阪、名古屋、鯖江の来賓四人協賛出演。

○…故前田秋声師追悼演奏会　十月二十四日(日)十時半名古屋大須中小企業福祉会館、主催名古屋秋声会。阿部秋子女史をはじめ一門の外東京竹下翠風、中谷襄水、京都平井春嶺、大阪中山鳳水、福井内田景水、名古屋安江弘水の諸氏応援出演。

吉井良三

時おりの列車通過に熱演の
師の手かすかに　ゆらぐを見たり
（大阪、京橋、若松殿にて）

名流会昼食に席を立てざりき
各地の名師　競いて語れば
（第五回日本琵琶楽名流会にて）

西郷天風（薩摩正派）、二月二十一日逝去、享年九十二。主人生前中は琵琶界の皆様方や、京絃紙に「我が道を行く六十五年（未完）」を寄稿して植村寞水先生等々に大変お世話になりました。ここに親しく御交遊を賜りました皆様に厚く御礼を申し上げますと共に、琵琶界の御発展を心から祈念させて戴きます。

昭和五十七年七月

東京都世田谷区船橋五―十二―三一
―一〇一号　西郷房子
電話〇三（三二九）四五五七番
友人代表　普門義則

（天風師の絃歴とその足跡）レコード吹込＝昭和七年から三十九年の間に五回。ラジオ放送＝昭和十年から四十年の間に五回。演奏足跡＝国内二十都道府県の外台湾、中国、印度支那等の各地で活躍。